

□ 高校生コンペ、総評

2021年9月13日
建築学系主任 南 泰裕

<動かない者>という世界状況における、想像力の遠投

哲学者のイマヌエル・カントは、ドイツのケーニヒスベルクという街で生まれ、そこから終生、一歩も出ることなく思索と教育、散策と研究に邁進し、生涯を送った。が、にもかかわらず、カントの思想は、近代以降の世界全体を根底から揺るがすほどに大きな影響力を持ち、それは今も続いている。哲学はもちろんのこと、建築や美術を含め、『判断力批判』をはじめとするその美学や空間論が、今なお乗り越えることの不可能なほどの、世界的に圧倒的な訴求力を持って染み渡っていることは、言を俟たない。

高校生建築コンペの総評をものすにあたり、ここでカントを想起したのは、他でもない。コロナ禍が席卷する現在において、世界の全ての人が、<動かない者>という様態を不可避免的に受容せざるを得ない状況のもとにあるからである。そしてその中で、建築的な想像力の射程を、どこまで広げられるか、という課題に、全ての建築関係者が直面してもいるからである。

かつてカントは、自らの意思で、<動かない者>であった。今回のコンペは、誰もが不可避免的に「動けない」というこの世界的状況の中で、逆に遠く離れた異郷の地をいかに想像し、そこでの暮らしを描き出すか、ということが課題であった。

これは、極めてむずかしいテーマである一方で、実は今、もっとも考えておくべき挑戦的な課題の一つでもあり、建築を創る／建築に住むという、往還的な行為の本質に触れている。

というのも、通常、建築は「実際に見ること、体験すること、住むこと」を旨として語られ、教育されることが、ほとんどデフォルトの条件になっているフィールドだからである。少なくとも、これまでは。

「建築は、実際に訪れて、体験しないと分からない」という紋切り型のクリシェを、おそらくはほとんどの建築関係者が、一度ならず聞かされ、あるいは他人に語っているはずである。私は大学2年のとき、建築家の安藤忠雄さんのアトリエに見習いに行っていた。その時に安藤さんが「建築を学ぶなら、インドに行くべきだ」と言うので、そういうものか、と素直に思い、大学4年の時にインドを一人で放浪し、何度か危ない目に遭った。また、大学院の時にはヨーロッパを1ヶ月間、一人で貧乏旅行をして、ル・コルビュジエをはじめとする様々な建築を見て回った。

その経験は、確かに強烈なものだったが、今、「現地に行って、建築を見るべきだ」という語り方をすることは、できない。

しかし一方で、現在のこうした状況は、素朴な「現地信仰主義」を相対化する契機である、と捉えることもできる。そもそも、建築を創るという行為は、現地にはいない／その場所を使わない他者としての設計者が、その場所と人と状況を可能な限りの想像力を働かせ、リアルとフィクシヨ

ンを行き来しつつ、具体的なモノとしての建築を生み出す行為であるほかないからである。

例えば、横浜客船ターミナルを設計したザエラ・ポロたちの建築家チームは、コンペ応募時に、現地を訪れてはいない。が、コンペで優勝して実現し、今では観光名所の一つになっている。そうした事例は、実は枚挙にいとまがない。

<動かない者>という状況において、はるか遠く離れた場所に、建築を想像／創造することは、逆説的に、実は建築の本来的な次元に接続している、極めてチャレンジングな行為なのである。

今回、多数の応募作品を全て審査する中で興味深かったのは、まず、対象敷地の国と地域が極めて多彩であったことである。選ばれていた場所を列挙すると、カナダ、アメリカ、ハワイ、中南米(カリブ海)、メキシコ、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、アイスランド、デンマーク、オランダ、ドイツ、チェコ、イタリア、スペイン、ギリシア、ケニヤ、オーストラリア、ニュージーランド、インドネシア、フィリピン、タイ、沖縄、等々であった。

さらにこれらを分類すると、島を敷地に選んでいる作品が多かった。島は、トマス・モアを想起するまでもなく、楽園やユートピアのイメージと重なるところもあるからだろう。

全体として、甲乙つけがたいユニークな力作が多く集まったが、以下、クオリティの高かった入選作および次点の作品について講評しておく。

まず1等となった優秀案の「木肌色の家(辻村 颯空さん 三重県立伊賀白鳳高等学校)」は、総合的にみて、文句なく一番評価が高かった。コンセプトの立て方と、過不足のない図面の配置、プレゼンの密度等、全体に渡って極めてバランスが良かった。インキングされた図面もきれいに描かれており、模型、パース、断面、アイソメによる表現も伝わりやすい。日本の長屋的な空間図式を、ベネチアの伝統的住居群に巧みに融合させている点も評価できる。素材に焦点を当てている点も、良い。

その上で指摘するならば、色彩をテーマにしている割には、図面自体がモノトーンになってしまっているのが惜しい。特に、インテリア・パースについては、もう少ししっかりカラーリ



写真1 ベネチア、ムラーノ島



写真2 ミラノ大聖堂



写真3 イタリア、サン・ジミニアーノでの建築研修の様

ングして、色彩表現をした方がコンセプトがはっきり伝わり、良かっただろう。また、ベネチアのこの諸島には、国土館大学の建築研修で私も訪れたが、ここでは満潮時にかなり高くまで床上浸水となるのが普通なので、そうした環境による構造材の腐食を考慮した場合、木造軸組及び木床が妥当かどうかは、検証の余地がある。加えて、木格子屋根以外の屋根がフラットルールとなっているが、隣地に建つ既存住居との連続性や雨仕舞いを考慮すると、軒を出した緩勾配の屋根とした方が良かったのではないか。パラペットの立ち上がりも、小さすぎる。これだと雨仕舞いとして不十分。さらに、こうしたプランニングであれば、2階部分にも最低限の水回りはあったほうが良い。2階、子供寝室のベッドにバッファーがないので、これではメンテができない。このスペースはもう少し大きくした方が良いだろう。

次に準優秀作の「Lamu Life～スワヒリの学び舎から～(大井 健太郎さん 富山県立高岡工芸高等学校)」は、ケニアの教育と居住、文化交流に焦点を当て、地域の伝統に即した案を提案している点がユニークだった。現状に対するリサーチと、問題点の整理も明快である。ただ、惜しむらくは、全体として社会科のレポート課題の延長となっている感がある。建築のコンペ作品としては、図面や絵の分量が少なく、文字が多すぎる。平面、立面、断面の一般図とちいさな外観パースしかないため、インテリアの気配が伝わらない。周辺を描いた配置図も載せるべき。また、1階を石積みのようなデザインとしているが、このあたりの伝統的住居の構法に準じているとすると、壁厚が薄すぎる。構造や構法についての検証が必要だろう。

また、SDGs を謳っているのは良いが、一方で例えば斎藤幸平が『人新世の「資本論」』で指摘しているように、SDGs 自体を無批判に受け止めて良いかどうかの検討も、欲しいところではある。

次に、佳作案 5 作品についてコメントする。

「Tαβ^タε^ベρ^エν^ルα^ナのおもてなし－食文化でつうじあう－(吉田ひかりさん 静岡県立科学技術高等学校)」は、ギリシャの開放的で爽やかな伝統的住居の気配をうまく描き出しており、見ていて清々しい。畳を使った、日本食の料理店というコンセプトも、実際に十分に成立するだろう。雛壇状に構成された外部テラスの雰囲気素晴らしい。青を基調としたプレゼンも、なかなかセンスあり。

ただし、プランを見ると、内部空間に窓が少なく、これでは内部はかなり暗い。この島のすぐそばのサントリー二島にも、国土館大学の建築研修で訪れたので現地の気配はよく分かるが、折角の晴れやかな地中海性気候の気配を、内部でも楽しめるような空間構成のアイデアが、さらに欲しかった。



写真 4 ギリシャ、サントリー二島

「境界線のない家(川枝夕姫さん 松山智咲さん 国立明石工業高等専門学校)」は、ゾウが建築の「モジュール」となっているかに見える点が面白い。亜熱帯の開放的な住居の気配を、うまくトレースしているデザインも良い。組積造と軸組を組み合わせている架構も興味深い。が、それぞれのユニットをなす組積部分をコアとして扱うのであれば、ここに構造的な水平力を負担させることで、もう少し柱を減らし、より自由な無限定空間を生み出すことができたのではないか。また、階段が大きすぎて、スケールアウトしすぎている。茶室部分には、水屋や床の間、踏み込み等をしつらえた方が良いだろう。

「Moi!!(遠藤春華さん 静岡県立科学技術高等学校)」は、楽しさを目一杯伝えようとするプレゼンが素晴らしい。現地の環境や慣習を、とてもよく調べている上に、地域の豊穡な文化資源が、分かりやすく伝わってくる。このままポスターとして使えるレベルだろう。字も綺麗で、イラストとのバランスも秀逸。離れとして、サウナ小屋やおもちゃの家があるのも楽しげで良い。ただしプランニングがやや物足りない。LDK に子供部屋が直接繋がっているが、これだけ余裕のある住宅なので、個室とコモンスペースを、空間的に切り離す操作がある方が良い。

「景色と暮らす家(鈴木涼太さん 北海道札幌工業高等学校)」は、メタボリズムのメガストラクチャーを彷彿とさせるダイナミックな造形に迫力がある。アイランドを敷地に、最上階に広々とした娯楽室を設置している点は、伸びやかで良い。ただし住宅というビルディングタイプを想定すると、建築としてはかなりオーバースペックとなっている感がある。住宅というより、小規模な博物館のスケールだろう。過剰に階段が多い点も気になる。「暮らすこと」の気配が伝わってこないのが、物足りない。内観パースが必要だろう。模型写真のライティングができていないので、写真が暗く見えるのがもったいない。

「「繋がる」家～テトリスハウス～In アムステルダム(川妻 美緒さん 鷗友学園女子高等学校)」は、「集合することと、独立性を確保すること」という、集合住宅の設計としての永遠のテーマを、うまく形にした案である。アムステルダムのテラスハウスをヒントに、外部空間を多彩に取り込んでいる点は楽しげである。ただし、プレゼンが全体的に雑になっている。通常、こうしたコンペの応募作品は、紙を折って提出するべきではない。また、文字や図面の切り貼りが雑で、図面も直角が綺麗に出ておらず、表記として不正確。きちんと全体の体裁を整えるべき。

上記の作品以外で、惜しくも佳作にはならなかったが、次点として評価の高かった作品は、以下の4作品である。

「円で包む縁(榊原 崇介さん 静岡県立浜松工業高等学校)」。同心円状の中庭型構成がユニーク。

「Life is like wine(鈴木 星さん 静岡県立科学技術高等学校)」。ワイン畑と住宅をうまく連続させている。

「Starry House～星降る家でちょうど良い生活～(宮本 萌那さん 静岡県立科学技術高等

学校)」。星空を望む、伏屋式構造の屋根裏部屋が心地よい。リリカルな気配が美しい。

「アイスランドで草屋根と過ごす。(岩戸 樹輝さん 東京都立工芸高等学校)」草屋根と水を使った、環境論的アプローチが良い。

以上をもって作品個別の講評とするが、本コンペにおいて大きなテーマとして浮かび上がってくるのは、総括すれば、次のような点である。

- ・インターナショナリズムとリージョナリズム(地域主義)を、どのように融合させるか
- ・現地の風土と伝統に対し、日本という文脈をどのように輸送・移植し、繋げていくか

「海外で暮らす」ということを想定した場合、駐在員及びその家族として数ヶ月～数年暮らす場合や、現地の外国人と結婚してそこに永住する場合、あるいは中短期滞在で1~2ヶ月程度、いるのとは、かなり様相が違って来る。私も研究滞在で以前、イスタンブールで家族と暮らし、ミマル・シナン芸術大学の建築学部にて、客員教授として赴任したことがあった。その時に痛感したが、海外で暮らす場合にまず大きいポイントは、やはり治安と利便性ということになるだろう。また、日本では体験できないような景色や立地も、大きなポイントになってくるが、異郷の地で

暮らすことの、拠り所のなさへの配慮も、考えるべきだろう。建築デザインの次元において、日本というものを表す場合、キッチュなジャポニズムの表現は、ともすれば露悪的になりかねないことは、言うまでもない。もとより、和洋折衷または融合ということ自体、分離派建築の堀口捨己を始め、近代以降の日本の建築においても大きなテーマとなっていたが、このコンペでも、そうした問題が伏在していたことは明らかである。さらに言えばこれらは、ケンス・フランプトンが論じていたクリティカル・リージョナリズム(批判的地域主義)の問題系とも繋がっており、本コンペの作品においても、そうした気配が感じられるものがいくつか散見された。

例えば日本に亡命し、桂離宮を絶賛して、日本の建築に造詣



写真 5 イスタンブールのアパート



写真 6 トルコでの学生建築ワークショップ

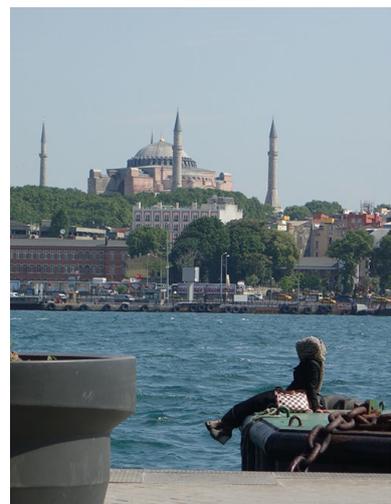


写真 7 アヤソフィア

が深かった建築家のブルーノ・タウトは、イスタンブールのボスポラス海峡沿いに、かつて、アジア風のデザインによる自邸を設計している。しかしそれは日本の建築文法をそのまま転写したのではなく、現地のコンテキストに合わせてアジアを再編集したデザインだった。これも、一種の反転したクリティカル・リージョナリズムと言えるだろう。

また、建築デザインの位相で、日本と海外、インターナショナリズムとリージョナリズム、伝統と創造をいかに止揚するか、ということをも、突き詰めて深く考え続けた建築家の一人が、丹下健三であった。

こうした、「日本と海外」「動くことと動かないこと」という古くて新しい建築的課題は、コロナ禍の現在において、異なった角度から多角的に浮かび上がってきた、と言えるだろう。

今回のこの高校生コンペの課題は、図らずも、こうした問題群に接続するものだったと同時に、おそらくは今後数年間にわたり、全ての建築関係者が、考え続けるテーマとなるだろう。

以上



ギリシャ、サントリーニ島スケッチ